

「オープンスペース」「余暇」「自然」そしてレジャー学のあり方

田中伸彦〔独〕森林総合研究所]

キーワード：オープンスペース、余暇、自然、間、次元、レジャー学

1. はじめに

本試論では、レジャー・レクリエーション学の中で、研究・考察の主題となることが多い「オープンスペース」、「余暇」、「自然」という3つのキーワードが、実は、「間」という観点から共通概念として語ることが可能ではないかという考え方を提示したい。続いて、これら3つのキーワードは「次元」という視点を適用することにより、1つの系統立てた意味的構造の上に並べることが可能であることを指摘したい。さらに「レジャー学」とは、より良い「オープンスペース」、より良い「余暇」、より良い「自然」を創造するために欠かせない、すべての次元軸を包括した統合的学問であることを提言したい。

2. 言葉の定義から共通する概念：「間」

広辞苑によると、「オープンスペース」、「余暇」、「自然」という3つのキーワードは、以下の様に説明されている。

「オープンスペース」：余地。空き地。

「余暇」：自分の自由に使える、あまった時間。ひま。いとま。＜日葡＞。「－を楽しむ」

「自然」：①（ジネンとも）おのずからそうになっているさま。天然のままで人為の加わらないさま。（「ひとりで（に）」の意で副詞的にも用いる）枕草子（267）「－に宮仕へ所にも、親はらからの中にてても、思はるる思はれぬがあるぞいとわびしきや」。「－そうなる」

②（7）〔哲学〕(physis ギリシャ・natura ラテン・nature イギリス・フランス)人工・人為となったものとしての文化に対し、人力によって変更・形成・規整されることなく、おのずからなる生成・展開によって成りいでた状態。超自然や恩寵に対していう場合もある。

(4)おのずからなる生成・展開を惹起させる本具の力としての、ものの性（たち）。本性。本質。太平記（2）「物相感ずること皆一なれば」

(5)山川・草木・海など、人類がそこで生れ、生活してきた場。特に、人が自分たちの生活の便宜から改造の手を加えていない物。また、人類の力を超えた力を示す森羅万象。「－破壊」「－の猛威」「－の摂理に従って生きる」

(6)精神に対し、外的経験の対象の総体。すなわち、物体界とその諸現象。

(7)歴史に対し、普遍性・反復性・法則性・必然性の立場から視た世界。

(8)自由・当為に対し、因果的必然の世界。

③人の力では予測できないこと。

(7)万一。平家物語（7）「－の事候はば」

(4)（副詞として）もし。ひょっとして。伽、一寸法師「一舟なくては如何あるべきとて」（広辞苑第5版より）

上記説明によれば、「オープンスペース」は「空間」の「間」を、「余暇」は「時間」の「間」を指していることが分かる。「自然」というキーワードについても②（エ）に「精神に対し、外的経験の対象の総体。すなわち、物体界とその諸現象」とあるとおり、人間の精神の外部、言いかえれば「思考」の「間」を指す意味を持つことが分かる。つまり、これら3つのキーワードは「間」という共通概念で共通点を持っていると言える。

3. 「間」の概念を秩序づける概念：「次元」

前項で、「オープンスペース」、「余暇」、「自然」という3つのキーワードはともに「間」という共通概念を持つことを指摘した。本項では、この共通性は、「次元」という視点から秩序づけることが可能であることを指摘したい。

「オープンスペース」とは縦・横・高さの3つの軸（空間軸）を持つため3次元構造を持つ。「余暇」は、その3次元構造に第4の新たな次元軸（時間軸）を加えることにより成立する。ちなみに、人間は3次元構造の中は自由に行き来可能であるが、第4の軸である時間軸は一方向つまり不可逆的にしか進むことができない。さらに考えると、この4次元という構造を解釈するためにはもう1つ上の次元から俯瞰的にものを捉える必要がある。この第5の軸を与えるものが、人間の思考（思考軸）である。「自然」とは、「空間軸」、「時間軸」、「思考軸」のすべてが揃うことで成立する概念だと考えられ、5次元構造をとっている。ちなみに思考軸は、空間軸・時間軸と異なり、行き来することや不可逆的に進むことができないどころか、人間が物理的に立ち入ることができない次元軸である。このように、3つのキーワードは次元的に段階づけられた秩序を持つことがわかる。

4. よりよい「オープンスペース」「余暇」「自然」を創造する学問：レジャー学

以上、「オープンスペース」、「余暇」、「自然」という3つのキーワードが「次元」という視点により秩序づけられることを指摘した。人間がより良く生きるためには、これら5次元の軸すべてで、より良い「間」を創造する必要がある。そのための学問が「レジャー学」ではないかということの本試論では提言したい。

より良い空間を創造するための学問として「造園学」など、より良い「余暇」を創造するための学問として「余暇学」など、より良い「自然」を捉えるための学問として倫理学や美学をはじめとする「哲学」などが、既に存在すると考えられる。そして「レジャー学」とは、「オープンスペース」、「余暇」、「自然」のすべての次元を対象として、与えられた「間」をより良くするという統合学問と捉えることはできるのではないだろうか。




以上2～4項で行った思索をまとめ、表-1に掲載する。

4. おわりに

本稿では「間」と「次元」をもとに、「オープンスペース」、「余暇」、「自然」の有機的統合を試みた。

未だ荒削りな試論の段階ではあるが、この様な観点からレジャー学のあり方を、今後探求していき、学術的基盤の強化を図っていきたいと考えている。

表-1 オープンスペース・余暇・自然の定義と対応する主要な学問領域

用語	次元数		定義	各々の「間」を扱う主な学問領域	統合的研究領域
オープンスペース	1～3次元 (空間次元)		空間における人為の届かない「間」	造園学など	レジャー学
余暇	4次元 (時間次元)		時間における人為の届かない「間」	余暇学など	
自然	5次元以上 (思考次元)		思考における人為の届かない「間」	哲学など	

【参考文献】(1) 新村出編(1998) 広辞苑 第五版, 岩波書店, 東京, p349, 590, 1174